



TITLE:

<第1章>高等教育研究開発推進センター外部評価懇談会(<1>外部評価懇談会<2>記録:外部評価委員・評価説明1)

AUTHOR(S):

近田, 政博

CITATION:

近田, 政博. <第1章>高等教育研究開発推進センター外部評価懇談会(<1>外部評価懇談会<2>記録:外部評価委員・評価説明1). 京都大学高等教育叢書 2006, 22: 56-57

ISSUE DATE:

2006-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54035>

RIGHT:

1. 近田 政博 氏（名古屋大学助教授／高等教育研究センター）

（近田） この評価説明と質疑討論のところがうまく切り分けられるかどうか、話がちょっと混ざってしまうかもしれないのですが、感じたところから申し上げたいと思います。

実は、私どもの名古屋大学のほうのセンターを作るときに、実際幾つか国内の高等教育関係のセンターをいろいろ調べまして、特に京都大学の旧センターについては、ウェブ上であれ、いろいろな資料であれ、調べたことがありました。これはちょうど平成 10 年に発足したものですから、今から 7 年前で、ちょうどこちらの旧センターが丸 4 年経過された時点のころだったと思うのですが、筑波大学さんのセンターであれ、北海道大学さんのセンター、いろいろなところを調査しました。

それで、今でも感じているのですが、外側から見たときの京大の旧センターあるいは現在のセンターの持っている強みはどこにあるのか。「ここは強いな」というのは外側から見てどういうところなのかということのを常々思っているわけです。

幾つかありまして、一つは、まず公開授業研究等、チームで一丸となって研究を進めていく、チームワークでプロジェクトを進めるスタイルですね。これは従来の、たとえば広島大学でやっておられたような形の政策研究やスタイルは、どちらかといえば、一人一人が研究課題を持って進めておられるものが多かったと思うのですが、こちらはやはりチームでやっている。そういう意味で、非常にチーム内での役割が明確になっている。これは非常に斬新で、まず一つこれを取り入れようというのが明確にありました。率直に申し上げて、まねをいたしました。

もう一つは、マクロな教育政策等ではなく、実際に教室の現場で起きている授業実践それ自体を研究にしようとする、そういう姿勢ですね。これは田中先生が常々おっしゃっておられることだと思うのですが、従来型の高等教育のマクロな政策研究等ではなかった視点であり、これもまねしようということで、明らかにまねをしました。2003 年だったでしょうか、出版された『大学教育学』、これは私どもの大学院の授業でも活用させていただいております。あの本が出版されていちばん喜んだのは、恐らく京都大学の先生よりも、全国で FD を指導せざるをえない、こういったセンターの人たちではないかと感じております。

3 点めですが、私どもが発足したときではなく数年たってからつくづく感じたのは、京都大学のセンターのほかにない特色は、ティーチングだけではなくラーニングのほうですね。特に溝上さんが中心になってやっておられる学生の学びに着目した研究、これを進めておられる。これは、この手のほかの研究センターにない特徴です。ところが、いろいろな世界の現状、大体教育・学習研究センター等の現状を見ますと、必ずティーチングとラーニングというのはセットになって行われています。ただ、FD のセンターなど日本じゅうにいろいろたくさんありますが、どちらかというとティーチングが中心で、ラーニングについてはそれほどまだ研究としては進んでいるわけではないので、以上 3 点は非常に京都大学のセンターの個性であり、強みであろうと。これを名古屋としては、距離ものぞ

み号で三十数分で着く非常に近い距離にありますので、常々意識せざるをえない、あるいは非常によく見えるものですから、いいところはどんどん取り入れていこうというつもりでやってまいりました。

今現在、私どもから見てこの京都大学のセンターに何を特にいちばん関心を抱いているかといいますと、それは改組されてどういうメリットがあったのか、それが果たして従来活動されていた活動内容にとって非常にいい刺激になっておられるのか、あるいは今説明いただいたような教育交流プロジェクトのような形で、従来なかったものが新しく立ち上がって、いい影響が出ておられるのかどうか。それは興味津々で注目しております。そのあたりについて、ぜひいろいろ教えていただければと思っています。それがお尋ねしたいことの1点です。

もう1点めは、この手の高等教育の研究センターは、私どもは最近いろいろな外国の事例を調査してみたのですが、センター・フォー・ティーチング・アンド・ラーニングのような形で教授学習センターとなっているところは、特にアメリカでは何十何百とあると思います。各大学、大体にそういった形のセンターはたくさんあると思うのですが、そういった教育・学習に特化したセンターと、もう一つはその高等教育の研究自体をするセンターがあると思います。

それは、たとえばオランダのトゥエンティ大学の CHEPS や、それから先ほどのカリフォルニア大学の事例などもそうだと思いますし、日本で言えば広島大学あるいは筑波大学がそれに該当するのだと思うのですが、そういった高等教育自体を研究対象としてリサーチを行う。そこには多分研究、あるいはマネジメントのような要素も入るかもしれませんが、そういった研究自体が目的のセンターなのか、いろいろな性格上の多様性があると思うのですが、京大さんのこのセンターの場合は、こういった方向性をこれから模索されようとしているのか、京都大学自体がこのセンターに対してどういう期待をされているのか。多分先ほど田中先生がおっしゃったことを、逆に私はその点についてお尋ねしたいぐらいなのですが、という点について、ぜひいろいろなお話を伺えればと思っています。

まだコメントということではないのですが、とりあえずそのぐらい簡単に申し上げたいと思います。

(田中) どうでしょうか。こちらのほうが答えていく時間は、あまりないように思います。そこで、とにかく差し当たって全部お話をお聞きして、あとで時間が余れば回答させていただきたいと思っています。